

EnCalの改善案

2013年5月30日
乃村研究室 河野 達生

1 はじめに

自身の研究が情報の可視化，整理に決定した．カレンダーの情報を扱うことを想定しているため，実際に EnCal を使用した．EnCal については次章で説明する．本資料は，EnCal を使用し，改善案を考察したものである．

2 EnCal とは

EnCal とは，作業発生の規則性を扱うカレンダーシステムである [1]．現在 EnCal の作業発生の予測手法に，過去の手法が用いられている [2]．図 1 に EnCal の UI を示す．EnCal の UI は以下の 4 つから構成されている．

- (1) 主として操作するカレンダー
主として操作するカレンダーは，タスクを登録できる．また，Missions や Event Forecasting からドラッグアンドドロップすることでタスクを登録できる．
- (2) 過去のカレンダー
過去のカレンダーは，主として操作するカレンダーと同様の機能を持つ．過去のカレンダーに登録されているタスクを主として操作するカレンダーにドラッグアンドドロップすることで，タスクを登録できる．
- (3) Missions
Missions は，関連性をもつタスクをまとめた Missions の一覧．
- (4) Event Forecasting
Event Forecasting は，予測されたタスクの一覧．



図 1: EnCal の UI

3 改善案

既存の UI に対する問題点と、これに対する改善案を考察した。考察した 5 つの問題点と改善案を以下に述べる。

- (1) Missions と Event Forecasting は、スクロールに従い追従し視界から消えないようにする。
月の下旬を参考にするために画面を下にスクロールすると、Missions と Event Forecasting が見えなくなってしまう問題がある。これにより、Missions と Event Forecasting の一覧からドラッグアンドドロップでの登録が困難になる。Missions と Event Forecasting は、使用頻度が高いと思われるため、スクロールに追従するように改善する。

- (2) 未来のカレンダを表示する.
ユーザは過去のカレンダから主として操作するカレンダにドラッグアンドドロップすることによりタスクを登録できる. しかし, 主として操作するカレンダに登録されているタスクを未来のカレンダに登録する場合, 一度過去のカレンダの表示月を変更し, 未来のカレンダとしなければならない問題がある. 例えば, 今年度から開催される勉強会のタスクを作成する. 過去に発生したことがないタスクであるため, 過去のカレンダを表示する必要はなくなる. そこで未来のカレンダを表示させることでユーザの作業を支援するよう改善する.
- (3) 次回の開催回数を予測する.
“第〇〇”という名前のタスクには, 周期性があるものが多い. Event Forecasting からタスクを作成する際, “第〇〇+1”と名前を変更しなければならない問題がある. このため, Event Forecasting に予測されている段階で, “第〇〇+1”と表示されるように改善する. 例えば, “第21回開発打合せ”のタスクを終え, 次回のタスクが予測される場合, “第22回開発打合せ”と予測されるよう改善する.
- (4) 複数の予定を扱えるようにする.
複数のタスクから Missions を作成することや一度に複数のタスクを削除することは, 頻繁に起こると考えられる. 現在では, 各タスクごとにミッションを作成する作業や削除する作業が必要になる. この作業は, ユーザにとって手間だという問題がある. 複数のタスクを扱うために, タスクの横にチェックボックスを作成して, 扱えるように改善する.
- (5) プロジェクトごとでカレンダを切り替えられるようにする.
ユーザのロールによって使用するカレンダが, 異なる可能性がある. ロールをプロジェクトと表し, プロジェクトごとに分けられるように改善する.

4 考察

3章に改善案を記載した. しかし, EnCal のコードをまだ理解していないため, 私の主観に依存している部分が多いと考えられる. コードの理解に加え, 周囲の意見を参考に実装する必要があるか検討しなければならない.

参考文献

- [1] 三原俊介，谷口秀夫，乃村能成，南裕也：作業発生の規則性を扱うカレンダーシステムの評価，情報処理学会論文誌，Vol.540，No.2，pp.630-638(2013).
- [2] 吉井英人，乃村能成，谷口秀夫：作業発生の規則性に基づく作業予測手法，マルチメディア通信と分散処理ワークショップ論文集，vol.2012，no.4，pp.58-64 (2012).